

# 備前邑久窯跡群出土文字資料に関する覚書

亀田修一

## 一 論文要旨

筆者は、岡山理科大学考古学研究室・博物館学芸員養成課程のメンバーとともに2010年から備前市佐山地区において、8世紀後半を中心とする時期の須恵器窯跡を2基、10世紀の須恵器窯跡を1基発掘調査した。そして8世紀後半を中心とする時期の2基の窯跡において、「大」ヘラ書き須恵器甕、「福」押印須恵器椀、「□□十六[年]」ヘラ書き銘文埴を検出した。

確かに各地の須恵器窯跡群においてヘラ書き文字資料が出土することはあるが、今回のように3基のうち2基の窯跡で文字資料が出土することはやはり比率としては高く、このような文字資料の存在は、邑久窯跡群の特徴の一つではないかと考えた。

そこで先学の研究成果によりながら、邑久窯跡群およびその周辺で出土しているヘラ書き・押印文字資料を集成し、その内容について、検討することとした。その結果、邑久窯跡群出土文字資料数は、7窯跡14点、周辺の消費遺跡は不確実なものを含めて5遺跡5点、合計12遺跡19点となった。時期は、7世紀末～8世紀前半と、8世紀後半にそれぞれまとまりがあることが推測できた。

文字は、ヘラ書き文字資料として、「上」「下」「大」「南」「物」「大皮」「大久」「大久」、「…議樂[名]…」 「…十六[年]…」 「… ? 國…」、そして押印された「福」がある。その意味は、1, 2文字のものは、その置かれる方向や場所、使用先、地名、人名、吉祥句などが想定され、長文のものはそれ自体ではよくわからないが、墓誌・買地券に関わるものと考えられた。「□□十六[年]」は共伴する資料から天平16(744)年、延暦16(797)年の可能性が推測された。

供給先としては、同一の文字で対比できてはいないが、邑久窯跡群で生産されたものは邑久郡内にひとまず運ばれたと推測され、形態・焼き具合・胎土分析などから少なくとも岡山県内各地に運ばれているものと推測された。

また、佐山東山窯跡の「福」押印須恵器椀や「□□十六[年]」ヘラ書き銘文埴は、地方窯業生産地における文字使用のあり方、当時の文字文化の広がりなどを推測することができる貴重な資料であることを再認識した。

そして、邑久窯跡群以外にも比較的まとまった文字資料の生産地が岡山県にはあり、今後そのような意識で調査・研究していくべきであろうことを述べた。

キーワード：備前、邑久窯跡群、文字資料、ヘラ書き文字資料、押印文字資料、墓誌、買地券

## 1. はじめに

備前邑久窯跡群では、「大皮」「大」「上」「下」などの文字資料が採集され、発掘調査でも出土している。

このような焼成以前にヘラ状の工具で文字や記号や絵などが記され、描かれたものは、生産者、生産体制、供給先などに関わるいろいろなことがらを表現していると考えられている。焼成後に記される墨書土器などは、受け取った先で書くものであり、生産者・窯などとは基本的に関わりがないものである。

つまりいわゆる「ヘラ書き」資料は須恵器などの生産段階の様相を知ることができる貴重な資料であると言える。

これまで邑久窯跡群、および旧邑久郡、および周辺地域の資料に関しては、岡田博(2006)や馬場昌一(2009)などが集成・検討してきた。

亀田・白石純・徳澤啓一らは邑久窯跡群の実態解明、備前焼のルーツをさぐるなどのテーマで、2010～2013年度科学研究費補助金によって備前市佐山地区の佐山新池1号窯跡、佐山東山窯跡などの発掘調査を行った。そして、佐山新池1号窯跡において「大」ヘラ書き須恵器甕、佐山東山窯跡において「福」押印須恵器碗などの文字資料を検出した(亀田ほか2014)。科学研究費補助金による発掘調査終了後も、未完掘であった佐山東山窯跡を2014年夏に発掘調査し、「□□十六[罫]」ヘラ書き銘文磚を検出した(亀田ほか2015)。

このように邑久窯跡群では、比較的まとまった文字資料が出土しており、この窯跡群に文字を知る人物たちがいたこと、「福」押印須恵器では「印」を知る・使用する人物がいたこと、そして「□□十六[罫]」ヘラ書き銘文磚は墓誌または買地券などの用途が想定され、そのような墓に関わる習俗・文化などを知る人物が近くにいたこと、そのような習俗を執り行う人物が近くにいたことなどが想定される。

つまりこの邑久窯跡群およびその周辺にはそのような人々がいたことが想定でき、古代邑久郡の当時の姿の解明に大いに役立つものと思っている。

そこで小稿では、先学の成果によりながら、新たな資料を追加し、邑久窯跡群およびその周辺の文字に関わる文化などを検討してみたい。なお、文字を記した窯で焼成されるものとして瓦もあるが、その供給先は基本的に寺院や役所などであり、ある程度限定される。そこで今回は須恵器を中心としたヘラ書き文字資料と押印須恵器などを主な対象として検討してみたい。

対象とする時期は、7、8世紀としておく。対象とする地域は、基本的に邑久窯跡群と旧邑久郡、および周辺地域(以下、「邑久郡地域」と表記する)であるが、関

連資料として岡山県内のヘラ書き文字資料も合わせ検討してみたい。

## 2. 資料

邑久窯跡群とそれ以外の邑久郡地域で出土したヘラ書き・押印文字資料をまとめたものが表1である。邑久窯跡群では14点確認されており、13点がヘラ書き資料であり、1点が押印資料である。それ以外の邑久郡地域の資料は不確実なものを含めて6点あり、いずれもヘラ書き資料である。

以下、それぞれの概要を述べる。

### (1) 邑久窯跡群の文字資料

寒風窯跡群(山磨1978, 亀田1997, 馬場編2009など)(図2-1~9)

まず、瀬戸内市牛窓町長浜の寒風窯跡群で9点出土している。1~3は2005~2008年に瀬戸内市教育委員会が行った寒風1-I号窯跡の発掘調査において灰原で出土した資料である。4~9は昭和の戦前期に時實黙水が採集した試料で、4~6は寒風1号窯跡の場所、7、8は寒風2号窯跡の場所、9は寒風3号窯跡の場所で採集したものである。

1, 2, 4は「大皮」と読むことが推測される資料で、1と4はともに杯蓋の外面天井部、つまみから少し離れたところに書かれており、「皮」の第3画目が一度左下に向かい、そのあとまっすぐ降りる特徴などから同一人物によって書かれた可能性が推測される資料である。2は杯身の外面体部に、正置すると逆になる方向に書かれたもので、前二者とは「皮」の第2画目のハネの仕方、第3画目が一本線でまっすぐ書かれている様子などで、やや異なり、別の人物によって書かれた可能性が推測される。

1の「大」の大きさは横約1.4cm×縦約1.3cm、2の「大」の大きさは横約1.6cm×縦約1.2(+)cm、4の「大」の大きさは横約1.2cm×縦約0.9cmである。

寒風窯跡群ではこのほかに「上」(4点)、「下」(2点)と書かれたものがある。いずれもそれぞれの画が直線的に書かれ、書き始めも書き終わりもそのまま静止せずに書かれた特徴がある。文字を書いたと推測される棒状工具はいずれも細く、尖ったものようで、特に3号窯跡のものが細く見えるが、明確に工具が異なるということはいえそうにない。

「上」の大きさは、1号窯跡のもの6は横約2.2cm×縦約1.4cm、2号窯跡の2点7、8は横約1.9cm×縦約1.2cm、横約1.5cm×縦約1.2cmで、線の細い3号窯跡のもの9が横約2.3cm×縦約2.0cmとやや大きい。「下」は1号窯跡群で2点出土しているが、どちらも左端が欠けており、幅がわからない。縦は約1.6cmと約1.9cmである。

一文字の大きさとしては、縦横1～2cmくらいのものが基本のようであるが、3号窯跡の「上」のみやや大きく、線も細いようである。

文字が記された器種は杯蓋、杯身、甕、壺、平瓶と多様である。器の内外面では、1-I号窯跡の甕の口縁部内面に「上」が書かれたものが1点あるが、ほかはすべて外面である。

このほか1-I号窯跡灰原で、「十」か「×」、「下」

の可能性があるものが出土している（馬場編2009、前者はp.47第22図21、後者は同第22図24）。

2005～2008年の発掘調査で出土した須恵器の年代観は、1-I号窯跡は7世紀末～8世紀前半、2号窯跡は7世紀中葉～8世紀前半、3号窯跡は7世紀末～8世紀前半と推測される。

三谷窯跡（中野2006）（図2-10）

10は、瀬戸内市邑久町尻海に位置する窯跡で長瀬薫に



図1 備前邑久窯跡群文字資料出土遺跡および関連遺跡位置図 (1/200,000)

(国土地理院発行20万分の1地勢図「姫路」「徳島」「高梁」「岡山及丸亀」一部改変)

- 1 寒風窯跡群 2 奥三谷窯跡 3 さざらし奥池窯跡 4 佐山新池1号窯跡 5 佐山東山窯跡 6 向山
- 7 水落古墳 8 西谷遺跡 9 大田原藤原の古墳 10 熊山遺跡 11 備前国分寺跡 12 備前国府跡

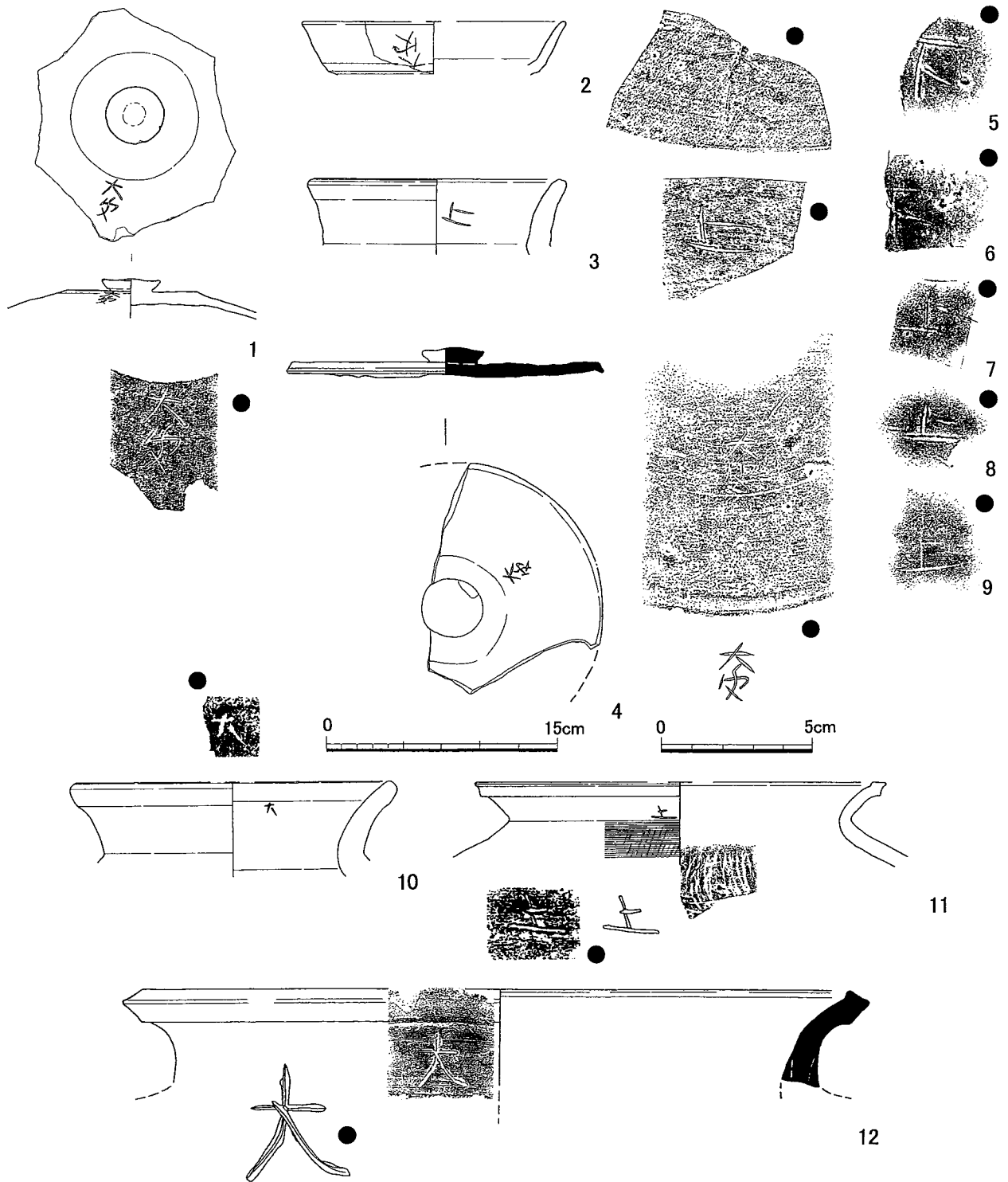


図2 邑久窯跡群出土ヘラ書き文字資料 (1/4, ●印は1/2)

- 1～3 寒風1-I号窯跡 4～6 寒風1号窯跡 7・8 寒風2号窯跡 9 寒風3号窯跡  
 10 三谷窯跡 11 さざらし奥池窯跡 12 佐山新池1号窯跡

よって採集された資料である。窯跡の細かな位置などは不明であるが、寒風窯跡群の東北東約1.8km、基本的に同じ山塊の北向きの谷部に位置する奥三谷窯跡と呼んでいるものと同一の窯跡の可能性が推測されている。

復元口径20.6cmの甕の口縁部内面に「大」がヘラ書きされている。横約1.2cm×縦約1.1cmとやや小さめで、第1画の右端部は静止してやや太くなり、第3画目の始まりもやや太くなっている。この表現は前述の寒風窯跡群のものとはやや異なっている。

ともに採集されている須恵器は、8世紀前半頃のものと推測される。

#### さざらし奥池窯跡（亀田2006b）（図2-11）

11は、瀬戸内市邑久町庄田に位置するさざらし奥池の堤防が1991年の集中豪雨のときに切れ、2基の窯体が確認され、採集された須恵器などの中に含まれていた資料である。窯跡は東西に走る道路を挟んで奥三谷窯跡の北北西約1km、寒風窯跡群の北西約2kmの南西向きの谷部に位置している。

復元口径27.2cmの甕の口縁部外面に「上」がヘラ書きされている。横約1.9cm×縦約1.2cmの大きさで、第1画目の縦棒が上部でやや左に傾き、第2画目の左端がその縦棒に重なり、第3画目の横棒は第1画目の縦棒下端にきれいに重なっている。いずれの画の端部も比較的静止した状態である。

ともに採集された須恵器は7世紀後半から8世紀後半頃までのものがあるが、この甕は口縁端部が外面と上面に平坦部を持つ特徴から8世紀後半を中心とする時期のものとして推測される。

#### 佐山新池1号窯跡（亀田ほか2014）（図2-12）

佐山新池1号窯跡は、瀬戸内市の北東側に位置する備前市南部の佐山地域の南西部に位置する。上記の3カ所の窯跡群の中で最も近いさざらし奥池窯跡の北東約2.8kmの場所である。

12は、岡山理科大学考古学研究室が行った2010年の発掘調査において灰原で出土した。

復元口径46.4cmの甕の口縁部外面に「大」がヘラ書きされている。これまでの文字に比べて大きく、横3.4cm×縦3.8cmあり、その線の太さは約3mmである。それぞれの画は丁寧にとめられており、第3画の左上部は第1画・第2画に重なり、第1画の上の一部でている。

このほかヘラ書き資料としては「一」「×」「V」などのヘラ記号はみられるが、文字はこの「大」のみのものである。

共伴する須恵器は8世紀後半を中心とする時期のもので、この甕もその口縁部の特徴からこの時期のものとして推測される。前述のさざらし奥池窯跡資料と類似した口縁部である。

#### 佐山東山窯跡（亀田ほか2014・2015）（図3-13、14）

佐山東山窯跡は、備前市佐山地域のほぼ西端に位置する佐山新池1号窯跡から東北東約1.7kmの佐山地域東端部に位置する。

2013年の発掘調査で13の「福」押印須恵器碗が出土し、2014年の発掘調査で14の「□□十六[田]」ヘラ書き銘文磚が出土した。場所は少し離れるが、ともに灰原から出土した。

共伴する須恵器は基本的に8世紀後半を中心とする時期のものであるが、2014年の調査で数は少ないが、10世紀頃のものも出土している。

「福」押印須恵器 13は、復元口径12.5cm、高さ4.7cmの碗の内面底部のほぼ中央に「福」と焼成前に押印された須恵器である。押印の大きさは横1.60cm、縦1.65cmで、ほぼ正方形の印である。この1.60～1.65cmという数値は1寸の半分（0.5寸）を意識して作られたものの可能性が考えられる。文字は印の押し方がやや傾いていたようで、文字上端から1cm下までは鮮明に見えるが、それ以下は不鮮明である。

禾（のぎへん）に「合」と「田」を足したような形をしており、後述するようにネ（しめすへん）は禾（のぎへん）で書かれることがあり、「福」ではないかと推測される<sup>1)</sup>。

「□□十六[田]」ヘラ書き銘文磚 14は、幅14.7cm、残存高5.2cm、厚さ1.6～1.7cmの須恵質の板である。厚さがやや薄いが、磚と呼んで良いであろう。両側面は本来の面を残しているが、上下はどちらも割れている。上下の破面は一部新鮮な部分もあるが、基本的に古く、現時点での上部、下部の破面は廃棄された当時のものと考えている。この横幅14.7cmは当時の1尺の半分、5寸を意識して作られたものではないかと考えている。

表裏面ともに、ヨコナデを基本とするが、部分的にナメナデ、タテナデがある。両側面はともに平らで、ヘラケズリ後にナデられているようである。胎土は1mm大前後以下の長石・石英がかなり多く入り、素地自体がやや粗めである。また素地が白色と暗赤褐色で一部縞状をなす部分がある。この胎土は、共伴する8世紀後半を中心とする時期の須恵器に近いようである。

この磚の一面（表面とする）には幅1mmほどの先端に尖った部分がある棒状のもので文字が記されている。右側面から3.6cm離れたところに、右上から「…[議]樂[田]…」[…十六[田]…]「…?國…」と3行分記されている。3行目の「國」の左側も3.4cm空白があり、左側面に到る。罫線などはない。裏面には何も記されていない。

最初の「議」として文字に関しては、上半分ほどが欠けており、はっきりしないが、左側は「ごんべん」の可能性が高く、右側は「我」の下の部分のように見える。このような文字はよくわからないが、「議」などが候補か

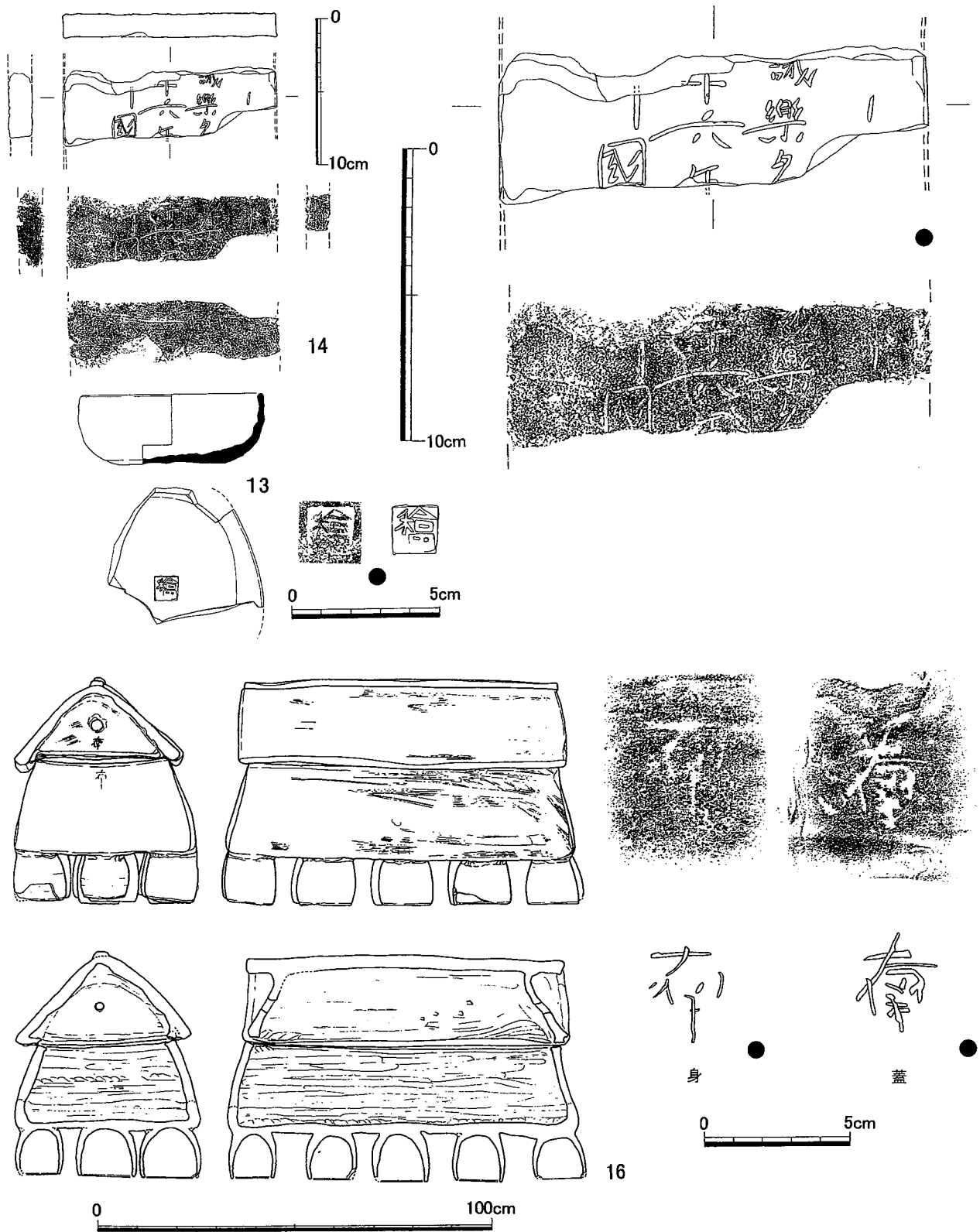


図3 邑久窯跡群・邑久郡地域出土ヘラ書き・押印文字資料 (13・14 : 1/4, 16 : 1/15, ●印は1/2)


13・14 佐山東山窯跡 16 水落古墳

と考えている。その次の字は「樂」で間違いのないと思われる。その次は「夕」の右下部に横棒があり、おそらく「名」ではないかと推測している。

2行目の最初の文字については、上が欠けており、はっきりしないが、「十」で良いのではないかと考えている。2字目は「六」で問題ないと考えている。3字目は上部しか残っておらず、やや不確実であるが、「年」で良いのではないかと考えている。

3行目の「國」も問題ないと思うが、その上の「丨」（縦棒）は文字の一部である可能性は高いと思うが、よくわからない。

それから、1行目の文字列の右側に約2cm離れて、縦棒があるが、これは文字ではなく、もともとのキズと思われる。

ひとまず、「…樂~~囧~~…」、「…十六~~囧~~…」、「…？國…」と読むことができそうであるが、その内容に関しては、意味がよくわからない。

ただ「十六~~囧~~」がこの読みで良ければ、当然年号と考えられる。この佐山東山窯跡で出土している須恵器は多少の幅はあるが、8世紀後半を中心とする時期と考えている。ただ、前述のように2014年の調査において、10世紀頃と考えられる須恵器碗などが出土した。しかし前述のように胎土は8世紀後半の須恵器に近いと思われる。そうすると、この「十六~~囧~~」は、天平16（744）年、延暦16（797）年が有力な候補となり、貞観16（874）年、延喜16（916）年もひとまず可能性があるものとなる。

このヘラ書き銘文塚の用途であるが、古代のこのような文字資料に関しては、墓誌、買地券が推測される。

## （2）邑久郡地域のヘラ書き文字資料

前節において、邑久窯跡群出土の文字資料を見てきた。ここではその関連資料として、邑久郡地域内で出土した7、8世紀のヘラ書き文字資料を簡単にみておく。

表1の15～20の資料である。

15（図4-15）は、瀬戸内市邑久町向山出土の横瓶の肩部に「上」がヘラ書きされたものである（岡田2006）。詳細は不明であるが、小林久磨雄1951『今城村史』にその写真が掲載されており、それ以前に確認されていることがわかる。ほぼ完形品で、古墳出土品ではないかと推測される。「上」は横約2.6cm×縦約2.0cmの大きさで、第1画目の縦棒は少し斜めになっている。第3画目の横棒の右端はきちんと静止しているようである。時期はよくわからないが、7～8世紀頃のものであろう。

16（図3-16）は、瀬戸内市邑久町水落古墳出土の須恵質切妻家形陶棺の屋根の妻部と身の小口部にそれぞれ「南」がヘラ書きされたものである（亀田2006a）。1956年畑の開墾中に横穴式石室が発見され、「南」銘を南に向けて置かれていた陶棺を長瀬薫が掘り上げたとのこと

である。

文字は、蓋と身のそれぞれ1ヵ所に書かれており、身の文字はかすれてやや見えにくいだが、大体の形はわかる。基本的に類似しており、特に「南」の第2画目の縦棒がともに右上から左下に斜めになるように書かれ、第3画と第4画で作るカマエの左側にまで伸びている。またカマエの中の「羊」が下にはみ出る特徴も類似しており、同一人物が書いたものと推測される。文字の大きさは、蓋のものが横約2.8cm×縦約3.4cm、身のものが横約2.6cm×縦約3.3cmとほぼ同じ大きさである。

陶棺の大きさであるが、身の上部の長さが80cm、同幅が35cmとやや小型で、脚は3列5本ずつ、合計15本の円筒形のものが接合されている。時期はほかの共伴遺物がよくわからないためはっきりしないが、7～8世紀頃と推測される。

17（図4-17）は、岡山県教育委員会が1983年に行った瀬戸内市長船町西須恵に位置する西谷遺跡の発掘調査においてNo.17掘立柱建物の周辺で出土した資料である（福田1985）。須恵器杯蓋の内面天井部に「物」と推測される文字がヘラ書きされている。文字の大きさは横約2.3cm×縦約1.6cmである。つまみがとれており、口縁部も残っていないため正確な時期はわからないが、共伴する須恵器の時期から7世紀末～8世紀前半頃と推測される。

この西谷遺跡は、邑久窯跡群の中でも比較的窯跡がまとまった西須恵地区の中にあり、7世紀中葉～8世紀前半に造営が進められたと考えられる須恵廃寺（亀田1998）の北約600mの位置にある。この文字資料と同時期と推測されるものとして、粘土採掘坑と推測される土坑、その中に廃棄されたと推測される須恵器、そして雨落ち溝を持つ掘立柱建物（No.17、1間×3間）などがあり、調査担当の福田正継は「周辺地域の窯業生産を掌握して製品の分配や流通を統制していた者が住んでいた」可能性を述べている。

出土する須恵器の中にみられる大型把手付平底鉢など「官」との関わりが推測される器種、須恵廃寺と関わる瓦などの出土も合わせ考えると、単なる一般集落でないことは間違いのないようであり、この「物」ヘラ書き文字資料もこの遺跡の重要性を語っているものと考えられる。

18（図4-18）は、現在和気町歴史民俗資料館に保管されているもので、「藤野村大田原字藤原」「古墳ヨリ」と墨書された「大久」ヘラ書き資料である（間壁1986、岡田2006）。口縁部が一部欠けているが、ほぼ完形品であり、墨書の通り、古墳出土品と考えて問題ないと思われる。その出土時期はよくわからないが、「藤野村」と墨書されていることから、和気町に合併される1953年以前に発見されたものと推測されている。

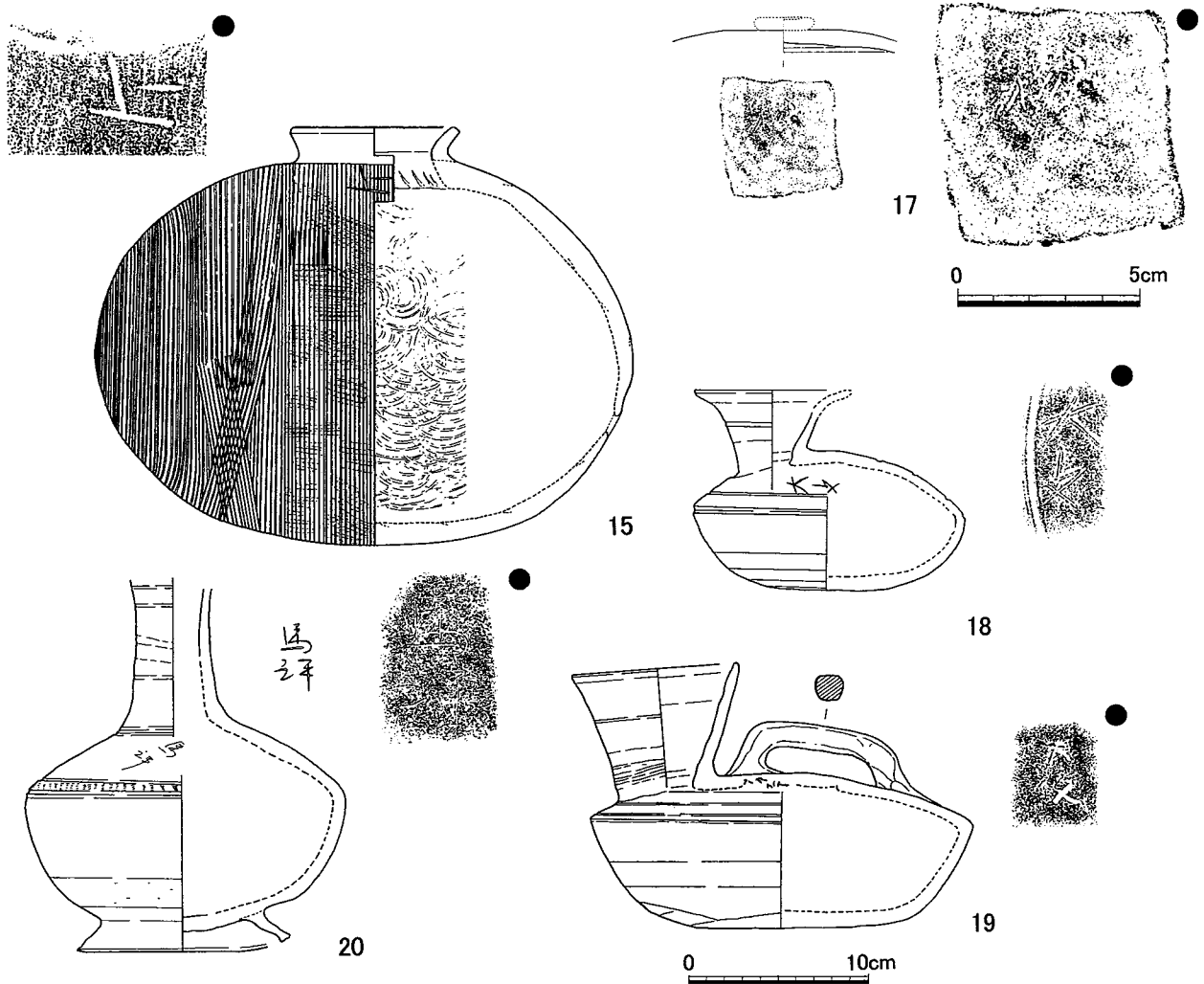


図4 邑久郡地域出土ヘラ書き文字資料と関連資料 (1/4, ●印は1/2)  
 15 向山 17 西谷遺跡 18 大田原藤原の古墳 19 伝邑久郡 20 出土地不詳

器種は平瓶で、その外面肩部に「大久」の文字が左から右に縦書きで書かれている。「大」の大きさは横約1.8cm×縦約1.6cmである。「久」は第1画目の下端近くから第2画目が始まり、第3画目が第2画目の斜めの棒を突き抜けている。「久」の大きさは横約1.3cm×縦約1.6cmである。比較的細身の工具でそれぞれの画が直線的に書かれている。

平瓶自体の大きさは、口径約8.7cm、胴部最大径約15.0cm、高さ約11.0cmで、小型品である。頸部から胴最大部までに4本の沈線がめぐらされ、上から2本目と3本目の沈線の間には文字は書かれている。時期は7世紀末～8世紀前半と推測されている。

この「大久」については、この備前南東部地域に位置した「邑久郡」の旧名「大伯郡」に由来すると考えられている。

19 (図4-19) は、伝邑久郡出土の「大久」ヘラ書き

平瓶である(間壁1986, 岡田2006)。詳細は不明であるが、「伝邑久郡」出土資料として現在岡山県立博物館に保管されている。完形品であり、古墳出土品と推測される。

把手付きの平瓶の外面肩部、頸部と把手部の近くに「大久」がヘラ書きされている。「久」の表現は第3画目が第2画目にかかる点は18と同じであるが、そのかかり具合は小さい。文字の大きさは、「大」が横約0.8cm×縦約0.7cm、「久」が横約1.3cm×縦約0.9cmで、これまでの例に比べるとやや小さめである。またその文字の大きさに比べて工具はやや太めで、三谷窯跡資料に近い。

平瓶自体の大きさは、口径約9.2cm、胴部最大径約21.1cm、高さ約14.6cmで、天井部に断面隅丸方形の把手がついている。時期は明確ではないが、7世紀末～8世紀前半と推測されている。

この「大久」に関しても、イ(にんべん)はついているが、前述の18と同じように古代邑久郡の地名を表した



ものと考えて良いであろう。

最後に、20(図4-20)の資料であるが、これは岡山県立博物館に保管され、「伝邑久郡出土」という説があることで邑久郡関係の資料として取り上げられているものである(伊藤1983, 岡田2006)。ただ、明確な根拠はないようである。

長頸壺で、肩部に「馬評」のヘラ書きがある。これまでの書き方と異なり、1画1画が明確に分かれず、草書風に続けて書かれている。時期はその「評」という文字も含めて、7世紀中葉～後半のものと考えられている。

また、「馬評」の意味として、伊予国宇麻郡の前身と考える説(伊藤1983)とともに、「駅評」つまり、「後の駅家にあたる機能が取り込まれていた初期の評を示した」との説がある(山中1994, pp.338-339)。後者の場合、この邑久郡周辺では「駅評」はわかっておらず、「駅家郷」であれば、備前では津高郡、備中では都宇郡、小田郡、後月郡にある。また邑久郡周辺における駅家は和気郡坂長駅、磐梨郡珂磨駅、赤坂郡高月駅があるが、関連はわからない。

### 3. 邑久窯跡群・邑久郡地域出土文字資料の語るもの

以上、邑久窯跡群および邑久郡地域で出土した7, 8世紀と考えられる、ヘラ書き文字資料、押印文字資料についてその概要をみてきた。

以下、器種、年代、文字などについてみていく。ただ、20の「馬評」資料に関しては、出土地が邑久郡地域であるかどうかははっきりせず、その文字の内容からも邑久郡との関わりがよくわからないことから、基本的に外し、関わりがある場合のみ取り上げる。

#### 器種

資料の種類は、須恵器と陶棺と埴がある。

須恵器は、杯蓋3点、杯身1点、椀1点、平瓶3点、横瓶1点、壺1点、甕7点と甕が最も多く、次いで杯蓋と平瓶が3点である。これを見ると少ない資料数ではあるが、甕の口縁部から頸部にかけて一文字書かれたものが多いことがわかる。その文字の種類は「上」3点、「下」2点、「大」2点である。




次いで杯蓋が3点あり、外面に「大皮」と書かれたものが2点、内面に「物」と書かれたものが1点ある。

そして平瓶の外面天井部というか肩部に書かれたものが3点あり、文字は「上」「大久」「大久」が各1点である。平瓶は杯類や甕類に比べて一般的に出土量が少ない。にもかかわらずこのように杯蓋と同じく3点出土していると言うことは、平瓶に文字を書くことに何か特別な意味があるのであろうか。さらに「大久」「大久」とあり、この地域の郡名を記しているものと考えられており、や

はり当時の平瓶という器種に対する何らかの意識を反映しているものと推測される。

ほかには杯身「大皮」、横瓶「上」、壺「上」、そして唯一の押印文字資料が椀である。ただこの椀は広義の杯身のグループに入れるべきものかもしれない。







以上のように、須恵器の器種については、平瓶に関して何らかの特別な意識が推測される以外は、明確な意味はわからない。

そして須恵器以外では、陶棺に「南」、埴に「…楽<sup>囗</sup>…」、「…十六<sup>囗</sup>…」、「…?國…」である。

#### 年代

窯跡出土資料の年代に関しては、確実な共伴資料としては7世紀中葉から8世紀後半頃のもののみみられる。




寒風窯跡群の2号窯跡資料が7世紀中葉まで遡る可能性はあるが、多く出土している1号窯跡資料のように基本的には7世紀末～8世紀前半に一つのまとまりがあるようである。そしてさざらし奥池窯跡や佐山新池1号窯跡や佐山東山窯跡の例のように8世紀後半にも一つのまとまりがあるようである。

「…楽<sup>囗</sup>…」、「…十六<sup>囗</sup>…」、「…?國…」ヘラ書き銘文埴に関しては、「十六<sup>囗</sup>」が年号であれば、前述のように天平16(744)年、延暦16(797)年が有力な候補であり、貞観16(874)年、延喜16(916)年もひとまず可能性があるものとなる。

また、消費遺跡の例としては、水落古墳の陶棺例がどの時期になるのか、気になるところであるが、小型品でもあり、向山出土品(古墳出土品の可能性が高い)、藤原の古墳出土品などとともに、基本的には7世紀末～8世紀前半のグループに属するのではないかと推測される。

つまり現時点では、大きくは7世紀末～8世紀後半にヘラ書き文字資料があり、7世紀末頃から8世紀前半のグループと8世紀後半のグループにまとまりがありそうである。

#### 文字



文字自体であるが、「上」「下」「大」「南」「物」など1文字をヘラ書きしたものと、「大皮」「大久」「大久」など2文字をヘラ書きしたものがあり、このほか、「…楽<sup>囗</sup>…」、「…十六<sup>囗</sup>…」、「…?國…」のように文章をヘラ書きしたもの、「福」を押印したものがある。

この「上」「下」に関しては、一般的にその置かれる方向・場所などを示していると推測されている。地名や人名などの可能性もなくはないが、この邑久郡地域ではよくわからない。

陶棺に記された「南」に関しては、石室内での置かれる方向を示したものと考えられているが、その可能性は十分考えられる。

西谷遺跡の「物」に関しては、もしこの読みが正しく、

表1 邑久窯跡群・邑久郡地域出土ヘラ書き・押印文字資料一覧表(7, 8世紀)

	遺跡名	所在地	文字	文字の大きさ (横×縦:約□cm)	種類・器種	文字部位	時期	参考文献
1	寒風1-1号窯跡	牛窓町長浜5139	大皮	大:1.4×1.3	杯蓋	外面天井部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
2	寒風1-1号窯跡	牛窓町長浜5139	大皮	大:1.6×1.2(+)	杯身	外面体部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
3	寒風1-1号窯跡	牛窓町長浜5139	上	上:2.2×1.4	甕	内面口縁部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
4	寒風1号窯跡群	牛窓町長浜5139	大皮	大:1.2×0.9	杯蓋	外面天井部	7世紀末~ 8世紀前半	亀田1997
5	寒風1号窯跡群	牛窓町長浜5139	下	下:縦1.6	甕	外面口縁部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
6	寒風1号窯跡群	牛窓町長浜5139	下	下:縦1.9	甕	外面口縁部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
7	寒風2号窯跡	牛窓町長浜5148	上	上:1.9×1.2	平瓶	外面天井部	7世紀中葉~ 8世紀前半	馬場2009
8	寒風2号窯跡	牛窓町長浜5148	上	上:1.5×1.2	壺	外面肩部	7世紀中葉~ 8世紀前半	馬場2009
9	寒風3号窯跡	牛窓町長浜6024	上	上:2.3×2.0	甕	外面口縁部	7世紀末~ 8世紀前半	馬場2009
10	三谷窯跡(奥三谷窯跡?)	邑久町尻海	大	大:1.2×1.1	甕	内面口縁部	8世紀前半	中野2006
11	さざらし奥池窯跡	邑久町庄田	上	上:1.9×1.2	甕	外面口縁部	8世紀後半	亀田2006b
12	佐山新池1号窯跡	備前市佐山4971・4966	大	大:3.4×3.8	甕	外面口縁部	8世紀後半	亀田ほか2014
13	佐山東山窯跡	備前市佐山3298-1	福:押印	福:1.5×1.55	椀	内面見込み	8世紀後半	亀田ほか2014
14	佐山東山窯跡	備前市佐山3298-1	「…  …」 「…十六  …」 「…?國…」		須恵質埴	表面	744年(?)・ 797年(?)	亀田ほか2015
15	向山	邑久町向山	上	2.6×2.0	横瓶	外面肩部	7~8世紀	岡田2006
16	水落古墳	邑久町山手	蓋:南, 身:南	蓋:2.8×3.4, 身:2.6×3.3	須恵質陶棺	屋根妻部・ 身小口部	7~8世紀	亀田2006a
17	西谷遺跡	長船町西谷	物	物:2.3×1.6	杯蓋	内面天井部	7世紀末~ 8世紀前半	福田1985
18	大田原藤原の古墳	和気郡和気町藤野大田原 字藤原	大久	大:1.8×1.6, 久:1.3×1.6	平瓶	外面天井部	7世紀末~ 8世紀前半	間壁1986, 岡田2006
19	伝邑久郡	伝邑久郡	大久	大:0.8×0.7, 久:1.3×0.9	平瓶	外面天井部	7世紀末~ 8世紀前半	間壁1986, 岡田2006
20	不詳	不詳	馬評		長頸壺	外面肩部	7世紀中葉~ 後半	伊藤1983, 岡田2006

\*牛窓町・邑久町・長船町は瀬戸内市内であり、ここでは瀬戸内市の表記は省略した。



その遺跡が須恵器生産の管理・選別・配送などに関わるものであるならば、まさにそのような仕事に関わる名称・ことがら、そして使用先を表記しているのかもしれない。

そして「大皮」については、2文字あり、「オホハ」と読めるようであり、可能性としては、地名、人名などが推測されるが、該当する地名や人名は現時点ではよくわからない。

「大久」「大久」については、古くから指摘されているように、備前南東部地域に位置した「邑久郡」の旧名「大伯郡」に由来すると考えられている。『日本書紀』齊明天皇7(661)年春正月甲辰(8日)条に「御船が大伯海に到った」とあり、少なくとも7世紀中葉頃にはこの地域が「大伯」と呼ばれていたものと推測される。また藤原宮(694~710年)出土木簡の中に「大伯評」「大伯郡」の記載があり、平城宮(710~784年)出土木簡に「邑久郡」の記載がある(久野1998)。「大伯郡」から「邑久郡」への変更は和銅6(713)年からであり、「大久」「大久」はその前後の表記と推測される。土器の年代も7世紀末

頃から8世紀前半頃と推測され、問題はなく、そのように考えて良いと思われる。

1文字ではあるが、三谷窯跡と佐山新池1号窯跡の「大」も上記の「大伯(邑久)郡」の「大」である可能性が考えられる。ただ、単純に「大きなもの」,「大きな〇〇」を示す「大」,供給先を示す「大」,人名の「大」などの可能性も無視はできない。

そして佐山東山窯跡の「……」,「…十六…」,「…?國…」に関しては、年号を含んでおり、後述するように墓誌や買地券の可能性が考えられるが、その内容に関してはよくわからない。



文字の表現方法に関しては、「十六」ヘラ書き銘文の文字が基本的に楷書体風ではあるが、やや軟らかめであり、陶棺の「南」もやや軟らかめである。「大皮」の「皮」の第3画目もつなげて表現している。それら以外のものは単純な文字であるからかもしれないが、直線を基本とした書き方である。そして、20の出土不詳の「馬評」も草書風に近く、異なる。

表2 岡山県内出土ヘラ書き・押印文字資料一覧表(7, 8世紀)

	遺跡名	所在地	文字	種類・器種	文字部位	時期	参考文献
1	岡・城が藩古墳	勝田郡奈義町岡	取	杯蓋	内面天井部	7世紀中葉	奈義町1984
2	平遺跡	勝田郡勝央町平	郡			8世紀?	岡山県1975a
3	平遺跡	勝田郡勝央町平	勝			8世紀?	岡山県1975a
4	美作国府跡	津山市山北	有	杯身		8世紀?	岡山県1974b, 岡田1992
5	美作国府跡	津山市山北	鉄				岡田1992
6	荒神風呂遺跡	真庭市西河内	中	平瓶	外面底部	8世紀	岡山県1990
7	荒神風呂遺跡	真庭市西河内	大口	杯蓋	内面天井部	8世紀後半	岡山県1990
8	荒神風呂遺跡	真庭市西河内	大	杯蓋	内面天井部	8世紀	岡山県1990
9	谷尻遺跡	真庭市谷尻	?				岡田1992
10	定北古墳	真庭市上中津井	記	土師質陶棺	蓋・身小口部	7世紀後半	新納・尾上編1995
11	門前池遺跡	赤磐市山陽	皿?	杯身	底	8世紀	岡山県1975b
12	馬屋遺跡	赤磐市馬屋	和(?)我	短頸壺	外面体部	8世紀	岡山県1995
13	馬屋遺跡	赤磐市馬屋	エ?	甕	内面口縁部		岡田1992, 岡山県1995
14	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市菅生	駄	杯身	内面底部	8世紀前半?	岡山県1993
15	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市菅生	駄	杯身	内面底部	8世紀前半?	岡山県1993
16	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市菅生	九	杯身	内面底部	8世紀前半?	岡山県1993
17	黒土窯跡	倉敷市玉島陶	本□				森・辰巳1975
18	横内北1号窯跡	倉敷市玉島陶	下	鉄鉢形須恵器	外面底部	8世紀後半	倉敷市2007
19	毎戸遺跡	小田郡矢掛町浅海	馬(焼成後)	土師器杯:丹塗・暗文	外面底部	8世紀	岡山県1974a
20	矢田部益足買地券	倉敷市真備町	…白髮部毗登富比賣之墓地… 天平寶字七年…(2枚)	土師質埴		763年	間壁忠彦・葦子1980
21	矢田部首人足刻字埴	総社市新本	矢田部首人足 寶龜七年完	須恵質埴		776年	間壁葦子1980
22	平遺跡	勝田郡勝央町平	郡(印)			8世紀	岡山県1975a
23	平遺跡	勝田郡勝央町平	印(印)			8世紀	岡山県1975a
24	平遺跡	勝田郡勝央町平	夫(印)			8世紀	岡山県1975a
25	豊久田窯跡	勝田郡勝央町豊久田	郡(印)	杯身	外面体部	8世紀	伊藤1987
26	美作国府跡	津山市山北	郡(印)			8世紀	岡田1992
27	美作国府跡	津山市山北	苦(印)7点	杯身	杯身外底	8世紀	中山2003, 岡山県1974b・2011
28	美作国府跡	津山市山北	林(印)	杯身	外面体部	8~9世紀	岡山県2011
29	百間川当麻遺跡	岡山市米田	「官」逆字(印)	杯身	外面底部	7世紀末~ 8世紀初	岡山県1982
30	前池内5号墳	岡山市津寺	「官」逆字(印)	杯蓋・身	外面底部	7世紀末~ 8世紀初	岡山県1994
31	道金山窯跡	総社市平山	「官」逆字(印)4点	杯蓋・身	つまみ上, 外面底部	7世紀末~ 8世紀初	亀田ほか1988
32	佐内古墳	高梁市中井町	「官」逆字(印)	杯身	外面底部	7世紀末~ 8世紀初	田仲1980

\*邑久郡地域の資料は、表1にあり、除いた。

それから、唯一の押印文字資料である佐山東山窯跡の「福」であるが、禾(のぎへん)に「合」と「田」を足したような形をしている。本来「福」はネ(しめすへん)であるが、禾(のぎへん)で表現されている。このような表現の例は、石川県白山市北安田北遺跡出土の銅印(9世紀末～10世紀)のものなどにみられ(松任市教育委員会1990, 国立歴史民俗博物館1996, p.112), 問題はない。そしてこの「福」の意味であるが、「福麻呂」などの人名、「福〇」などの地名、吉祥句としての「福」などが推測されるが、地名に関しては、この付近では確認できない。

岡山県内の古代の文字資料に関しては、岡田博が集成・検討しており(岡田1992), それをもとに岡山県内の古代のヘラ書き文字資料を集成したものが表2である<sup>2)</sup>。備前では、上記の邑久郡関連資料以外に、赤磐市門前池遺跡の「Ⅲ?」須恵器杯身(8世紀:岡山県教育委員会1975), 同馬屋遺跡の「和(?)我」須恵器短頸壺, 「エ(?)」須恵器甕(8世紀:岡田1992, 岡山県教育委員会1995)などがある。

美作では、奈義町岡・城が端古墳の「取」須恵器杯蓋(7世紀中葉:奈義町教育委員会1984), 勝央町平遺跡の「郡」・「勝」須恵器(岡山県教育委員会1975a), 津山市美作国府跡の「有」「鉄」須恵器(岡田1992), 真庭市荒神風呂遺跡の「中」須恵器平瓶・「大□」・「大」須恵器杯蓋(8世紀:岡山県教育委員会1990)などがある。

岡・城が端古墳の「取」須恵器は7世紀中葉頃と推測される杯蓋の内面天井部にヘラ書きされており、現時点で岡山県内最古のヘラ書き文字資料である。この「取」の意味はよくわからない。

「郡」は「郡」であり、「勝」は平遺跡が位置する「勝田郡」を示していると考えられており、問題ないであろう。

備中では、倉敷市菅生小学校裏山遺跡の「叡」須恵器杯身(同じ文字2点, 8世紀?), 「九」須恵器杯身(8世紀前半?:岡山県教育委員会1993), 矢掛町の毎戸遺跡「馬」土師器杯身(丹塗で暗文を施し, 焼成後ヘラ書き, 8世紀:岡山県教育委員会1974a), 真庭市谷尻遺跡(未確認, 岡田1992), 同定北古墳の「記」陶棺(7世紀後半:新納・尾上編1995)などがある。この3号陶棺の蓋と身に記された「記」は、埋葬時の陶棺の方向を示す「しるし」と理解されている。

次に押印文字資料であるが、岡山県内での7, 8世紀と推測されるものは、美作勝央町平遺跡の「郡」「印」「夫」須恵器(岡山県教育委員会1975a), 同豊久田窯跡の「郡」須恵器杯身(8世紀:伊藤1987), 美作国府跡の「郡」「苦」「林」須恵器(8～9世紀:岡山県教育委員会1973・2011, 岡田1992, 中山2003), 備中道金山窯跡(亀田ほか1988)・備中佐内古墳(田仲1980)・備中前池内5号墳(岡山県教育委員会1994)・備前百間川当麻遺跡(岡山県教育委員会1982)などの「官」逆字押印須

恵器(7世紀末～8世紀初)などがある。

「郡」は地域としての「郡」を示し、「苦」はその地域の「苦田郡」を示すものと考えられる。「印」はハンコの「印」であり、「官」は役所としての「官」を示すものと推測される。「林」は苦田郡林田郷と推測され、「夫」はよくわからない。

須恵器に文字を押印したものは、全国の資料を精査したわけではないが、さほど多いとは思われない。そのような中で岡山県内では上記のように「郡」「印」「夫」「苦」「林」(以上, 美作), 「官」(備中), そして今回の「福」(備前)がある。特に美作地域が多いことは指摘してよさそうである<sup>3)</sup>。

### 生産・供給関係

消費遺跡である瀬戸内市邑久町向山出土の「上」銘資料の文字は直線的に書かれており、全く同じようなものではないが、寒風窯跡群の「上」銘資料と大きな違いもなく、邑久窯跡群のある窯から運ばれた可能性は推測される。これは、遺跡間の距離(約6km)からも問題はなさそうである。

また、水落古墳の「南」銘陶棺の文字は行書風で、やや軟らかめの筆致であるが、邑久窯跡群の一つのまとまりをもつ西須恵地区の一部に位置し、邑久郡地域を中心に分布する須恵質切妻式家形陶棺であることから、細かな供給関係は確認できないが、この邑久窯跡群で生産された可能性は十分あると思われる。

西谷遺跡の「物」銘杯蓋もその遺跡が西須恵地区の中に位置すること、遺跡内の遺構のあり方から集積場・分別場などの性格が推測されていることから邑久窯跡群で生産されたものと推測される。

そして和気町藤原出土の「大久」銘平瓶に関しては、これまでの資料に比べ邑久窯跡群から少し離れている点は気になるが、和気町域にこの時期の明確な須恵器窯跡はよくわかっておらず、ひとまず邑久窯跡群のどこかの窯で生産された可能性を考えておきたい。

一方、この邑久窯跡群で生産された須恵器などについては、今回取り扱ったヘラ書き文字資料のうち「大皮」「大」「下」の例や、押印文字資料の「福」の例などはこれまで消費遺跡において関連資料を見出すことができていない。しかし、邑久窯跡群の資料は、基本的にこの邑久郡地域に供給されるとともに、備前国の中枢部に運ばれたものと推測している。8世紀の資料に関しては、胎土分析によって備前中枢部や備中中枢部、さらに讃岐まで供給された可能性が推測されている(白石2014)。

今後消費遺跡において関連する文字資料が確認できれば、その需給関係を知ることができる。

### 「□□十六[田]」ヘラ書き銘文塚について

「…[調]楽[田]…」, 「…十六[田]…」, 「…? 國…」の内容に関しては、残念ながら「□□十六[田]」ヘラ書き

銘が年号を示すであろうと推測する以外に、よくわからない。そしてその性格としてはこれまで述べてきたように墓誌や買地券が最も可能性が高いように思われる<sup>4)</sup>。

墓誌とした場合、確実な年号のわかる日本古代の墓誌は、668年の河内船首王後銅板墓誌が最も古く、延暦3(784)年の河内紀吉継塼製墓誌が最も新しい。塼製の墓誌として確実なものは河内紀吉継墓誌が唯一であり、年号が確認される墓誌としても最も新しい。その大きさは縦25.3cm、横15.7cm、厚さ6.1cmと厚く、2枚1組である。これは中国の方式に習ったものと考えられている。

このように確実な塼製の墓誌は現時点でこの紀吉継墓誌しかなく、もしこの佐山東山窯跡出土「□□十六[匣]」ヘラ書き銘文塼が墓誌であるならば、日本で2番目の塼製墓誌資料となる。

また、買地券に関しては、8世紀末～9世紀前半の筑前宮ノ本遺跡の鉛製買地券(中間ほか1980)<sup>5)</sup>と天平宝字7(763)年の塼製の備中矢田部益足買地券(間壁忠彦・間壁葎子1980)がある。

後者は2枚あり、土師質で、その大きさは、A:縦41.8cm、横20.3cm、厚さ2.2cm、B:縦41.8cm、横21.8cm、厚さ2.2cmとほぼ同じである。銘文は、行ごとの文字が一部ずれたり、一部欠けるなどしているが、基本的に同じで、「備中国下道郡八田郷戸主矢田部石安□白髮毗登富比賣之墓地以天平寶字七年々次癸卯十月十六日八田郷長矢田部益足之買地券文」と読むことができるようである。

塼製のものはこの矢田部益足買地券のみであり、佐山東山窯跡の銘文塼が買地券であるならば、先の墓誌と同じように、日本で2番目の塼製買地券となるのである。塼の厚さは2.2cmで、比較的薄手の粘土板(塼)に記すという点は類似している。

またこの矢田部益足買地券に関しては、関連資料として「矢田部首人足/寶龜七年定」銘塼がある(間壁葎子1980)。長さ27.5～28.5cm、上幅13.5cm、下幅12cm、中央部厚さ1.3cm、両端厚さ0.8cmで、須恵質の焼きの悪いものとされている。表裏はタテ方向の粗いハケ調整のようである。この「寶龜七年」は776年で、763年の矢田部益足買地券と比較的近く、検討した間壁葎子は「この塼が買地券と関りない処から出土していたとしても、当地方出土の可能性は極めて高いと云えるであろう。」(間壁葎子1980, p.56)とその関連を考えている。

「□□十六[匣]」ヘラ書き銘文塼は、現時点では塼の形態、文字の内容、表現方法などから墓誌・買地券どちらも決めがたい。しかし、矢田部益足買地券は薄い板状の塼であるという形態的特徴、文章の配列が不揃いであることなどの点において佐山東山窯跡資料と類似している。

以上のように、今回出土した「□□十六[匣]」ヘラ書

き銘文塼は、天平16(744)年または延暦16(797)年の墓誌または買地券の可能性が高い、極めて貴重な資料とすることができる。

また、佐山東山窯跡では、8世紀後半を中心とする時期の須恵器をおもに生産しているが、それらとともに「福」押印須恵器と「□□十六[匣]」ヘラ書き銘文塼を生産しているようである。1つの窯跡<sup>6)</sup>から2種類の、それも極めて珍しい文字資料が出土することは、当然稀なことである。そのほかの須恵器の器種などからも「官」との関わりが想定されていたが、「□□十六[匣]」ヘラ書き銘文塼はさらに「官人層」との関わりを推測させる。その性格が墓誌にせよ買地券にせよ、そのような埋葬に関わる文化をもつ人がこの地域にいたことを教えてくれており、佐山東山窯跡を含めた邑久窯跡群の経営のあり方が注目される。

#### 4. おわりに

以上、先学の研究成果によりながら、邑久窯跡群およびその周辺で出土しているヘラ書き文字資料を集成し、その内容について若干ではあるが、検討してきた。

まず、窯跡群出土資料数は、寒風1号窯跡群を1遺跡とすると、寒風窯跡群が3遺跡9点、佐山東山窯跡が1遺跡2点、その他は1遺跡1点ずつで、合計窯跡資料は7遺跡14点である。そして周辺の消費遺跡は不確実なものを含めて、旧の邑久町、長船町、和気町などで5遺跡5点である。つまり、合計12遺跡19点である。

時期は、水落古墳の陶棺がいつの時期になるのかよくわからないが、寒風2号窯跡の資料が共伴資料から7世紀中葉まで遡る可能性がある。しかし、隣接する1号窯跡の資料を参考にすると現時点で7世紀末～8世紀前半頃が最古段階のものと考えた方が良いように思われる。大田原藤原の古墳出土平瓶もこの頃で問題ないようである。以上のように7世紀末～8世紀前半段階のものが現時点で最も古く、多いようである。

また、8世紀後半にも一つのまとまりがあるようである。

文字としては、ヘラ書き文字資料として「上」「下」「大」「南」「物」など1文字のもの、「大皮」「大久」「大久」など2文字のもの、「□□十六[匣]」銘文塼のように長文のもの、そして「福」押印須恵器のように1文字を押印したものがある。

その意味としては、1,2文字のものは、その置かれる方向や場所、使用先、地名、人名、吉祥句などが想定される。長文のものはそれ自体ではよくわからないが、現時点では墓誌・買地券に関わるものと考えている。「十六[匣]」は共伴する資料から天平16(744)年、延暦16(797)年の可能性が高そうである。

供給先としては、同一の文字で対比できてはいないが、邑久窯跡群で生産されたものは邑久郡内にひとまず運ばれたと推測される。ただ、形態・焼き具合・胎土分析などから少なくとも岡山県内各地に運ばれているようであり、さらに香川県、そして大阪府や奈良県（平城宮など）などに運ばれたことが推測されている（白石2001）。今後文字資料を検討する中で、さらなる移動が確認できるかもしれない。

最後に、岡山県全域の文字資料をすべて検討したわけではないので、想像の域を出ないが、備前・備中・美作のそれぞれの地域の窯跡群でヘラ書き文字資料や押印文字資料が確認されており、少なくとも7世紀末頃から8世紀代には各地の窯跡群の窯に文字を使用することができ人物がいたことは明らかであり、今後そのような意識で窯跡群の調査をすべきであると思っている。

また、美作地域に押印文字資料が多いのは一つの特徴なのであろうか。美濃の「美濃」「美濃国」は有名であるが、武蔵の鳩山窯跡群もまとまっているようである（巽2000）。関東の場合は刻印瓦との関係もありそうで、単純には言えないが、岡山県も比較的まとまった押印文字資料の生産地のようなものである。邑久窯跡群でも今後そのような意識で調査・研究していくべきであろうと考えている。

最後になりましたが、小稿をなすにあたり、下記の方々にお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。なお、失礼ながら敬称は省略させていただきました。

井上信正、今津勝紀、大谷博志、岡田博、小田裕樹、狩野久、坂上康俊、佐藤信、白石純、徳澤啓一、中野雅美、仁藤敦史、馬場昌一、馬場基、平川南、福田正継、村上岳、森内秀造、山本祥隆、若松拳史、渡辺晃宏、渡邊誠

## 註

- 1) この「福」押印須恵器、「□□十六[印]」ヘラ書き銘文埴の解説に関しては、狩野久、平川南、佐藤信、坂上康俊、渡辺晃宏、馬場基、山本祥隆などの諸先生方にご教示いただいた。記して謝意を表したい。
- 2) 岡山県の文字資料については、岡田博さん、今津勝紀さん、村上岳さんにご教示いただき、資料の提供を受けた。記して謝意を表したい。
- 3) 岡山県に近接する地域として、香川県においても綾歌郡綾川町北条池1号窯跡と庄屋原2号窯跡で8世紀中葉頃の同じ印を使用した「中」押印須恵器が出土している（中山・佐藤1998）。この「中」に関しては、「那珂郡」の「那珂」と考えられている。そして、この窯跡が位置するところは「阿野郡」であり、「那珂郡」は一つ別の郡を挟んで西側にあることから、産地を示す印ではなく、発注者側の確認のための印と推測されている。

香川県の文字資料に関しては、渡邊誠さんにご教示いただいた。記して謝意を表したい。

- 4) 墓誌・買地券に関しては、基本的に奈良国立文化財研究所1977、岡本敏行編2004などを参照した。
- 5) 宮ノ本遺跡買地券に関しては、井上信正さんにご教示いただいた。記して謝意を表したい。
- 6) 佐山東山窯跡は現在も調査を継続しており、ひとまず1基と考えているが、詳細は今後の調査で明らかにしたい。

## 参考文献（五十音順）

- 伊藤晃1987「第11章 窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館, pp.531-588
- 伊藤純1983「岡山県立博物館所蔵の須恵器銘『馬評』について」『古代文化』35-2, 古代学協会, pp.40-42
- 岡田博1992「34 官衙」近藤義郎編『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社, pp.413-465
- 岡田博2006「42 文字資料」邑久町史編纂委員会編『邑久町史考古編』瀬戸内市, pp.540-546
- 岡本敏行編2004『古墳から奈良時代墳墓へー古代律令国家の墓制ー』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 岡山県教育委員会1974a『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（5）国鉄井原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 岡山県教育委員会1974b『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3』
- 岡山県教育委員会1975a『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5』
- 岡山県教育委員会1975b『門前池遺跡』
- 岡山県教育委員会1982『百間川当麻遺跡2』
- 岡山県教育委員会1990『荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳』
- 岡山県教育委員会1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5』
- 岡山県教育委員会1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』
- 岡山県教育委員会1995『松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか』
- 岡山県教育委員会2011『美作国府跡・小田中遺跡・山北遺跡』
- 亀田修一1997「寒風窯跡群」牛窓町史編纂委員会『牛窓町史資料編Ⅱ』牛窓町, pp.234-246
- 亀田修一1998「47 須恵廃寺」長船町史編纂委員会『長船町史史料編（上）考古 古代 中世』長船町, pp.282-303
- 亀田修一2006a「35 水落古墳」邑久町史編纂委員会編『邑久町史考古編』瀬戸内市, pp.476-481
- 亀田修一2006b「75 さざらし奥池窯跡」邑久町史編纂委員会編『邑久町史考古編』瀬戸内市, pp.729-733
- 亀田修一・伊藤晃・和泉弘幸・石田義人1988「「官」逆字押印須恵器についてー備中道金山窯跡採集資料を中心にー」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会, pp.289-314
- 亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前邑久窯跡群の研究ー西日本における古代窯業生産の研究ー』岡山理科大学考古学研究室
- 亀田修一・白石純・徳澤啓一編2015『佐山東山窯跡群第4次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室
- 倉敷埋蔵文化財センター2007『横内北窯跡群1号・下庄遺跡・上東遺跡』

国立歴史民俗博物館1996『日本古代印集成』

白石純2001「原始・古代 第三章 古墳の時代 第二節 古代牛窓の産業 三 科学が語る須恵器・瓦（鷓尾）の移動」『牛窓町史通史編』牛窓町, pp.163-173

白石純2014「第2節 輪状つまみ杯蓋の産地推定」亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前邑久窯跡群の研究－西日本における古代窯業生産の研究－』岡山理科大学考古学研究室, pp.127-134

巽淳一郎研究代表2000『記号・文字・印を刻した須恵器の集成－平成9年～11年科学研究費補助金（基盤研究C2）研究成果報告－』奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

田仲満雄1980「高梁市佐内古墳出土の遺物について」『古代吉備』8, pp.54-57

中野雅美2006「82 三谷窯跡」邑久町史編纂委員会編『邑久町史考古編』瀬戸内市, pp.759-761

中間研志・高倉洋彰・山本信夫・横田義章1980『宮ノ本遺跡』太宰府町教育委員会

中山俊紀2003「美作国府跡出土の刻印及び墨書土器」『年報津山弥生の里』10, 津山弥生の里文化財センター, pp.23-29

中山尚子・佐藤竜馬1998「北条池1号窯跡採集の刻印須恵器～十瓶山窯跡群の須恵器とその検討課題（3）～」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VI, (財)香川県埋蔵文化財調査センター, pp.65-78

奈義町教育委員会1984『岡・城が端古墳発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1977『日本古代の墓誌』

新納泉・尾上元規編1995『定北古墳』岡山大学考古学研究室

馬場昌一2009「第4章 まとめにかえて 第5節 出土遺物 2 刻書文字」馬場昌一編『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』瀬戸内市教育委員会, pp.173-181

馬場昌一編2009『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』

瀬戸内市教育委員会

久野修義編1998「古代 中世」長船町史編纂委員会『長船町史史料編（上）考古 古代 中世』長船町

福田正継1985『西谷遺跡』長船町教育委員会

古市晃2002「新たに見つかった古代の文字資料」『広報おく』573, 邑久町, p.18

間壁忠彦・間壁霞子1980「天平宝字七年矢田部益足之買地券文（白髮部毗登富<sub>田</sub>賣之墓地券）の検討」『倉敷考古館研究集報』15, 倉敷考古館, pp.1-37

間壁霞子1980「「矢田部首人足」刻字磚」『倉敷考古館研究集報』15, 倉敷考古館, pp.46-57

間壁霞子1986「「大久」銘の平瓶と二、三の問題」『倉敷考古館研究集報』19, 倉敷考古館, pp.33-48

森浩一・辰巳和弘1975「古代の土器に書かれた文字集成」上田正昭編『日本古代文化の研究 文字』社会思想社, pp.229-253

山磨康平1978『寒風古窯址群』岡山県教育委員会

松任市教育委員会1990『松任市北安田北遺跡II』

山中敏史1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

吉村武彦研究代表2002『古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究－平成11年度～13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書－』明治大学文学部

#### 引用挿図（いずれも一部改変引用）

図2-1～3, 5～9：馬場編2009, 図2-4：亀田1997, 図2-10：中野2006, 図2-11：亀田2006b, 図2-12, 図3-13：亀田ほか2014, 図3-14：亀田ほか2015, 図3-16：亀田2006a, 図4-15, 18～20：岡田2006, 図4-17：福田1985

【連絡先：岡山理科大学生物地球学部生物地球学科考古学研究室・〒700-0005 岡山市北区理大町1-1】

